

「心豊かに、生きる力をはぐくむ教育の研究」
～学ぶ意欲を持ち、共に学び合う集団の育成を意図して～

I 研究の内容

本校の学校教育における意識の中心にある「学校は勉強するところ」をを目指し、「よりよい集団づくり」と「授業の構造化」に焦点をあて、本年度も全校一丸となって実践してきた。これにより、主体的に学習に取り組む態度の育成、思考力、判断力、表現力の育成、さらに学習意欲、学習習慣の構築と定着、家庭学習の習慣化が特に課題と考えた。

研究目標を説明すると学級集団づくりを基盤として、学力向上を目指していくものである。学級集団と学力向上の2点に相関があることが明らかにされており、今までの研究からも学級集団が良好であると生徒の本来持っている能力以上に学力が向上し、定着することは明らかであり（オーバー・アチーバー、アンダー・アチーバー）、本校の歴史をみてもそれを物語っている。そこで、学級集団づくりの方法として、生徒の社会性を身に付けることを目的とし、対人関係の形成に一定の効果が報告されている「シャル・スキル・トレーニング（以下 SST と表記）」や「構成的グループエンカウンター（以下 SGE と表記）」をはじめとしたグループ・アプローチを導入してきており、それを本年度も踏襲し、充実を図った。

「ベストを尽くす塩中」をスローガンに、「塩中魂」「塩中生の生活規範」を掲げ、学級や学年など、共に学ぶ仲間との関係を構築していくための授業や諸活動の充実を目指し、「学ぶ意欲を持ち、共に学び合う集団の育成」を図るための取り組みとして、前年度までの研究を引き継ぎながら、より効果的に、効率的に研究実践を高めるための手立てを模索しながら、研究の推進に努めた。

II 研究の柱となる具体的内容と方法

1 意欲的に学ぶ集団づくりに関わって

- (1) 学びの場として、基本となる授業規律の確立。(SST)
- (2) 「hyperQ-U(よりよい学校生活と友だちづくりのためのアンケート)」の実施と分析(K13法)・活用。
- (3) 「話し合いのルール」を生徒会と連携して周知→「学びの集会」を実施。
- (4) 学級集団におけるルールとリレーションの育成。→(グルグルSGE トキドキSST)

2 各教科における現状の把握とそれに伴う指導方法の改善に関わって

- (1) 各種検査、試験の分析による生徒の実態把握と指導方法の改善。(Q-Uの活用)
- (2) 各種検査、試験の分析から課題をとらえ「ステップアップ授業」の授業研究に活かす。
- (3) 「hyperQ-U」による集団分析→集団の型に合った授業を仕組む。(授業の構造化)
- (4) 実技教科における指導目標の明確化。
- (5) 評価方法の検討。

3 学びの主体となる生徒の「質的」向上に関わって

- (1) 学力向上への取り組み(家庭学習の習慣化とステップアップノートの活用)。
- (2) 道徳教育の充実による生徒の情操の育成。
- (3) 国語力向上の取り組みの継続。

4 研究授業の実施

上記1～3に対していずれか踏まえ、研究の検証の場として全職員が一人一実践として、「ステップアップ授業」として公開授業を実施した。

Ⅲ 成果と課題

1 成果

hyperQ-Uを年2回実施し「K13法」を用いて学級集団アセスメントをおこなう中で、学年職員～全教員が対応策や指導支援に関わる「引き出し」の共有化を図りながら、一人ひとりの生徒に対してそれぞれの教員がそれぞれの立場から、協力しながら指導の充実を図った。具体的な方策として、以下のことが上げられる。

- (1) 学級の状況に合った学級集団づくり（対人スキルの育成をねらいとする）のために、全校一斉に、意図的・定期的にSST,SGE実施。

2回目のQUの分析をみても、どのクラスも1回目より方が学級満足群に属する生徒の割合が、全国平均より明らかに高い数値を示している。これは、分析的確に行い、意図して個や集団に働きかけたり、手立てをしたり、不満足群や非承認群の生徒に対する働きかけを工夫しながら手立てを促すことにより、安心して過ごせる集団であるという意識に変わってきている成果であると考えられる。また、「スクールワイド」の考えの基、「学年所属が誰もが担任」という意識で生徒と接触することにより、学級枠を超えた集団活動においても、同様な指導が期待でき、同様な活動が行えるという安心感が、より生徒のやる気を発揮させる活動へとつながっていると考える。

こういった生徒の変容は、活動ばかりではなく行事終了時に振り返りとして行う「共同絵画」などにも顕著に表れており、「よりよい集団づくり」への取り組みは、確実に結実していると考えられる。

- (2) 学級の状態に合った授業づくり（授業スキルの育成をねらいとする）のために、「①縦型と横型によって、授業スキルを変える」、「②授業の構造化（ルーチン化）」、「③Q-U式座席表の活用」、「④電子黒板の活用」など授業実践。

授業の構造化は、学習の目的意識がしっかり持つことができ段階的定着を図ることにより効果的な学習成果が期待できるとともに、生徒も集中して授業に臨むことができていた。

また、Q-U座席表を基に、意図的な小集団を活用した話し合い活動により、「学び合い」「教え合い」が深まり、より「アクティブ」な学習へと繋がってきていると考える。

2 まとめと課題

甲州市「確かな学力育成」プロジェクトを基盤とし、それを深化させるべく研究を推進し、「よりよい集団づくり」が、各場面で成果として現れつつある。

また、授業の基盤である「授業の構造化」が定着し、どの授業も安心してのぞみその成果も着実に付いてきている。

更に伸張していくためには、次のステップとして家庭学習の効果的な持ち方、意欲の喚起が課題であり、そこには家庭との連携は不可欠であると思われる。また、目的がはっきりしない活動にはどうしても不安感が生まれることもあり、目的意識を高める手立ても重要である。また、ITC環境の充実も今後重要になってくる。そのようなことを踏まえ、今後も本研究を継続し、質を高めていくことが大切であると考えられる。

(研究主任 小林 誠治)